

吉野川の恵み、スジアオリ養殖技術の研究

増養殖担当 團 昭紀

天然採苗による養殖生産は不安定なものであったが、水産試験場の人工採苗技術の開発により、安定したものとなった。開発された人工採苗技術は、スジアオリ藻体を細断することにより、藻体の細胞を孢子嚢化させ任意に大量の孢子を得ることができるものである。

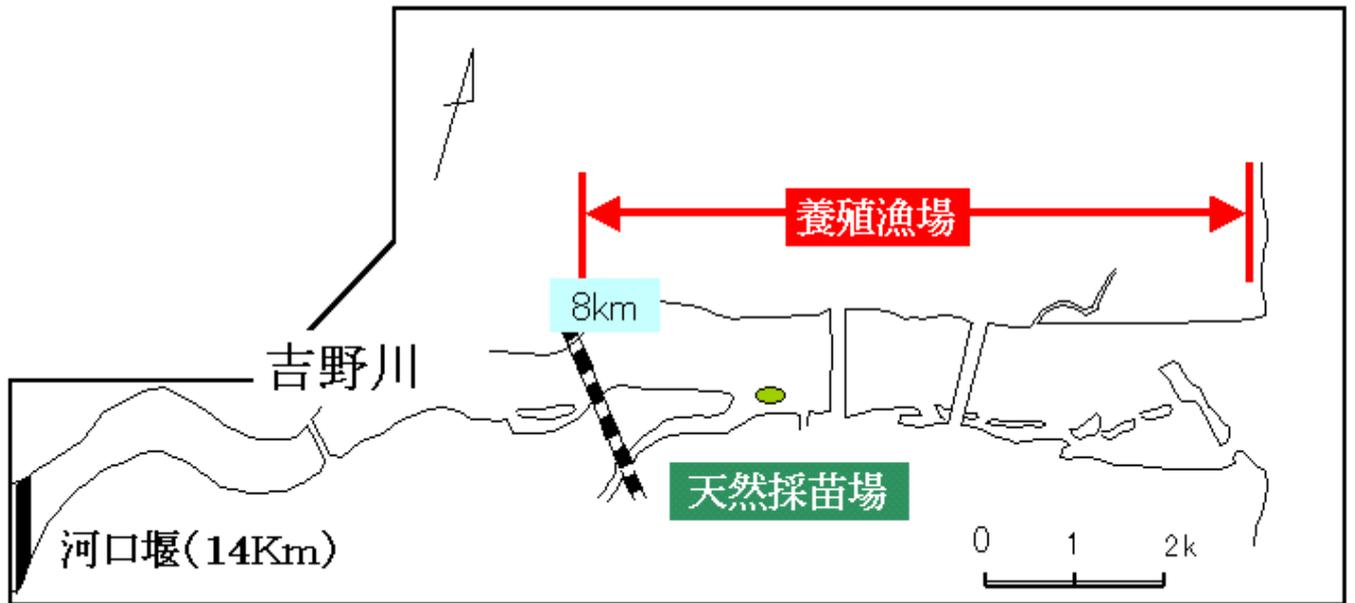
この方法は、吉野川のスジアオリ養殖漁業者に普及し、県外の養殖地域にも拡がりつつある。



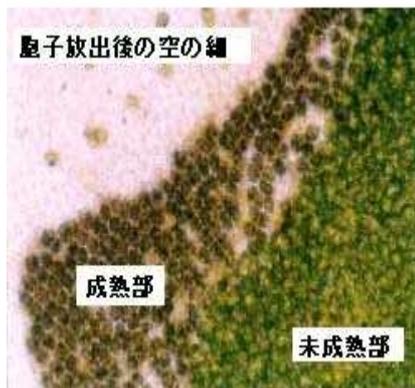
吉野川でのスジアオリ養殖は、杭柵方式と浮き流し方式とがある。
浮き流し養殖により水深の深い場所でも養殖が可能となり生産量が増加した。



吉野川では、時期にもよるが採苗してから1ヶ月で収穫サイズの20～30cmに成長する。



吉野川は、河口から14km上流の堰までが感潮域であり、川というより内湾的性格である。養殖漁場は河口から8km上流までで、流入する小河川との合流地点にある中州が天然採苗場となっている。



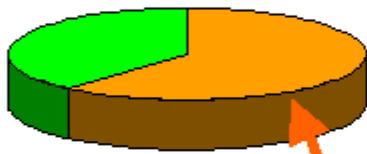
ミキサーにより藻体を細断する。

数日のうちに藻体片は成熟し、胞子液に養殖網を漬ける。

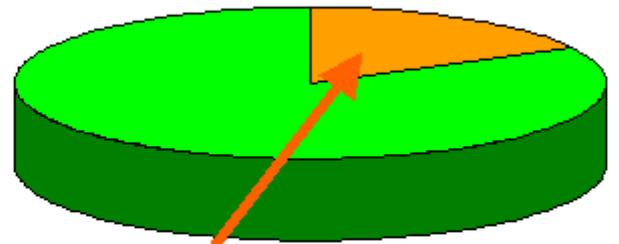
胞子を放出する。

採苗は4～6時間で終わる。

春漁期生産



秋漁期生産



人工採苗

平成 12 年春漁期では、全生産量のうち61%が、平成 11 年秋漁期では17%が人工採苗により生産されている。春漁期は、例年天然採苗が行いにくいため人工採苗による生産が多い。